

ウィロークリーク教会 Garry Poole 師を迎えて

日時：2006 年 4 月 25 日

場所：本郷台キリスト教会ダイヤモンドチャペル

池田博、池田登喜子、木島正敏、佐藤賢二

ホーリネス茅ヶ崎教会：中道師、SDA：宮本師他

カンバーランド長老高座教会、他

<Garry Poole 師>

ウィロークリーク教会とビルハイベルズから、みなさんにご挨拶を申し上げます。

日本にはクリスチャンが 1%以下しかいない、ということを昨日知りました。しかし、実はアメリカでも同じような問題があるのです。それは、多くの人がクリスチャンと言いながら、実際にはまったくそのように生きていない人が多いということです。

今日はまず、ウィロークリーク教会の全体像を話したいと思います。そして、自分自身の役割である、伝道について話すことが出来ればと思います。しかし、できるだけ多くの時間を対話に割きたいと思います。もし質問があれば、いつでもご自由になさってください。

ウィロークリーク教会は、30 年前に始まりました。そのときから、今までの教会のあり方と反対するような形で、「ノンクリスチャンのための礼拝」を持つようになりました。意図的に礼拝をノンクリスチャンのためにデザインしようとしたのです。しかし、多くのクリスチャンはそのあり方には賛同しませんでした。

具体的には、日曜日はノンクリスチャンのための時と定め、信者のための礼拝は、水曜日の夜に行なう事にしました。水曜日は、聖書のより深い学びと讃美という、一般的な教会の「礼拝」とほぼ同じ内容でおこないます。そして日曜日は、キリスト教 101（入門、紹介、初歩クラス）とし、現代風の音楽を、そして時にはセキュラーの音楽を用いたりしました。ノンクリスチャンの考え方にフィットしたメッセージ、ドラマや音楽を用いました。その結果、実際にノンクリスチャンがたくさんやってきたのです。そして、シカゴで何かを求めているなら、ウィロークリークに行きなさい、という評判も立ちました。その彼らが自分達の友達を連れてきました。そして大きな教会になりました。今では 7,000 人入る会堂が建ち、日曜には 20,000 人以上の方々が集まってきます。しかし、数が問題なのではありません。20,000 人でも 1 人でも重要さは変わりません。私たちは、どうしたらコミュニティにインパクトを与える事ができるのか、ということを常に考えているのです。

しばらくしてから、そこで救われた方々の成長の場としてスモールグループを始めました。そして新しいクリスチャンが成長していく事が出来るようなカリキュラムをつくり、実践していきました。

「ネットワーク」というワークブックは、彼らがそれぞれの賜物を発見し、それをどのように用いていく事ができるのかを見出す手引きとなっています。

<木島師>

アメリカでも日本でも社会が階層化されていますが、教会の敷居を低くして人々が来やすいようにするという時、特別に意識した階層の方々はいらっしゃいますか。

<Garry Poole 師>

私たちの定義で「求道者 (Seeker)」と呼ばれるのは、イエスキリストを信じていない方々すべての事です。それは本人が実際に求めていると意識しているかどうかは関係なくそのように呼んでいます。社会的、経済的、職業的にどのような層から来ているかなどという背景には全く関係ありません。しかし、私たちの教会が置かれている地域の方々の特徴というのはあります。この地域では、どちらかというと豊かな人々が住んでいるので、自然とそういう方々が多くなっています。実際には、教会の周囲 20 マイル以内にどんな方々が住んでいるのかという調査も行なっています。

<木島師>

伝道目的の礼拝をするというとき、またドラマをするときも、そういうことを意識していますか。

<Garry Poole 師>

私たちが具体的に意識した対象者は、「中年層の男性」です。なぜなら、彼らをキリストに導くのが一番難しく、逆にもし彼らを導く事ができるのなら、他の方々を導く事もできるのではないかと考えたからです。

初めにこれを始めるとき、家々を一軒一軒たずねて、調査しました。「あなたは教会に行っていますか」、もしその方が行っているならそこで調査は終わりです。もし行っていなかったら、「なぜですか」と尋ねると、教会やクリスチャンに対しての多くの批判的なイメージが返ってきました。「教会はつまらない、彼らは裁きのだ。自分は裁かれた気がする。あそこは普通の場所じゃない。」など。そのような方々には、「もっとお話してください。どんな礼拝だったら行きたいと思うのですか？」とさらに聴きました。すると、「私の毎日の生活に関連性のある事」というのが多くの方々の声でした。そこで、だんだん様子が見えてきました。多くの人にとって、自分の生活をイエスと関連付けるのは難しいのです。そこで私たちは、「イエスがどのような方であるかという事は妥協しない」けれども、「どうしたら、それを彼らが自分の生活に関連付けられる事ができるようになるか」を常に考えて、一つの取り組みの目標としました。今、もうそれから 30 年たちました。今でも常に、どうしたら彼らノンクリスチャンに効果的に届く事が出来るかということを考え続けています。

先ほど述べた、現在行なっている調査の結果、この地域には多くのヒスパニックの方々がおられることが分かりました。したがって、ヒスパニックの方々のための礼拝を用意することにしました。そして、さらに彼らがなぜ教会に来ないのかを聞きました。私たちは、どんなに苦労してでも、このような文化にイエスキリストを届けたいと思っているのです。

<中道師>

「感染力の強いクリスチャン」や、「勇気あるリーダーシップ」を読みました。そこには、ビルハイベルズの負担が大きくなりすぎて、他の方々が同じレベルでメッセージを出来るようにトレーニングしたとの記述がありましたが、それについて教えてください。

<Garry Poole 師>

最初は、ビル先生がメッセージをしないと人数が目に見えて減りました。では、どのように他のメッセンジャーのレベルをあげたのでしょうか。彼はまず、ティーチング・チームを作り、彼らをメンターし、ビル先生自身が評価するというやり方をしました。一日に 4 回礼拝があるなら、それぞれ別の

メッセージが語り、その後ビル先生から直接評価を受けました。多くのクリスチャンが、ビルハイベルズ以外の人からメッセージする、チームティーチングはうまくいかないと考えました。しかし、実際にはそれは非常にはうまくいったのです。

<中道師>

ビル先生のコピーではなく、それぞれの賜物や多様性を生かしてメッセージをするように訓練するために、ビル師はどのように導いたのかに興味があります。以前、私がアメリカの日系人教会にいたとき、主任牧師、アソシエイトパスターが、3週間置きにメッセージを行っていたのですが、ウィロークリークではどのように行なっていますか。隔週ではなく、何週か置きでやっているのですか。

<Garry Poole 師>

私たちは、普通一つのトピックを6週間でおこないます。毎週それぞれの先生がシリーズの中の違ったトピックを担当します。しかし、時にはビル先生が4週間行なうこともあります。その面でも、バラエティがあることが良いと考えています。

<中道師>

ビル師は伝道に長けていると思うが、伝道的なメッセージの時はビル師の比重が大きいのでしょうか。それともあらゆるメッセージをシェアするのか。

<Garry Poole 師>

もちろん、ビル師が伝道の賜物は大きいと思うが、それも含めてみんなシェアしています。

<カンバーランド長老教会、元栄師>

水曜日に礼拝をしているとのことですが、その特別な目的は何ですか。

<Garry Poole 師>

水曜日に行なっているのは、より深い礼拝（ワーシップ）、メッセージ、聖餐式です。普通の教会で、日曜日にやっている礼拝とほぼ同じだと考えて良いと思います。確かにいろんなクリスチャンがいます。そして、それぞれがどこにいても、成長できるように取り組んでいます。

スモールグループでは、個々のクリスチャンに、より即した形で成長を促す事ができます。スモールグループについてビル師がよく用いる話があります。

ビル師は、結婚した方々の小グループを導いていました。そして彼らは非常に親しくなりました。彼らは、毎週日曜日に集まっていて、午前中は、いつもビル師のメッセージを聞いていました。ある日曜日の午後、いつものように分かち合いをしました。ある方が自分自身の葛藤を打ち明けました。ビル師は、その方の話を聞いてショックを受けました。そして、「あなたは今日教会に行きましたか？私はまさにそのテーマについて、メッセージをしていたのです。」

メッセージが伝わっていると思っても、小グループで話をしないとなかなか自分の生活の中に溶け込んでいけないのです。礼拝も用いられます。小グループも用いられます。しかし、小グループの環境が、彼らの生活の中心となるのです。

<カンバーランド長老教会、元栄師>

今、私たちの教会でも、まさに小グループを行なおうとしています。しかし、伝統を守ってきたなかで小グループの導入にはハードルがある。私たちの教会では、現在日曜日の礼拝ですべてをやろうとしている感じがします。またその全ての情報を週報で網羅しようとしています。伝道委員会、奉仕委員会など、数ページにわたるっています。週報については、どのような用い方をされていますか。

<Garry Poole 師>

今、私たちは、ほとんどの情報は Web サイトで網羅している。週報にあまり多くの情報を詰め込むと、読まない人が出てきて役に立たなくなる可能性もあります。

<池田師>

30 年前から求道者向けの礼拝を始め、そして今も求めているとの事、感銘を受けました。私たちも 95 年から小グループを導入しはじめました。ウィロークリークでは、小グループを導入し始めた後、その役割がより大きくなったのでしょうか？ どのような比重になってきたのでしょうか。ウィロークリークが行き詰って小グループを導入することになったという事も転機だったと思うのですが、ぜひ、そのあたりの事を聞かせてください。

<Garry Poole 師>

教会が大きくなりすぎて、人々がつながらなくなってしまいました。そして、彼らがつながる事ができるようにと、取り組みをしたのです。以下が、ウィロークリークの取り組みです。

ウィロークリークのミッション・・・「非宗教的な人々をキリストに完全に従う者へと変える。」

<その 1： ノンクリスチャンへのアプローチ>

- ① 友情 (Friendship)
- ② 証しと福音を分かち合う (Share)
- ③ 招待 (Invite)・・・日曜日の礼拝へ

<その 2： キリストに完全に従うものへ>

- ④ 礼拝 (Worship Service / New Community)・・・水曜日の礼拝へ
- ⑤ 小グループ (Small Group)
- ⑥ 奉仕 (Serve)・・・自分の賜物を通して人々に仕える。
- ⑦ よき管理者 (Good Stewardship)・・・賜物、財、時間。経済的な事柄は、献身の最終的な取り扱い。

<中道師>

私たちのイメージでは、小グループというとき、アウトリーチではなく、成長のための関係作りという風に聴いているが、ウィロークリークではむしろ弟子化のために用意された働きと理解してよろしいでしょうか。

<Garry Poole 師>

まさに、その通りです。しかし、今ウィロークリークでは違う形での小グループを模索しています。

私がウィロークリークで働きをしている一つの理由は、ノンクリスチャンのための小グループを行なうということです。

今は、上記③と④の間に、「求道者のための小グループ」を用意しているのです。今回、シンガポールでも、それについて数日間教えてきたところです。ウィロークリークの方法を学ぼうとする方々から、小さい教会では、③も④も二つともやることはできないとの批判を受けることがあります。これをやるとなると、大きな変化が必要だと。どんなことをしてでもウィロークリークと同じように行なおうとする人がいるのですが、その場合、2つの事が起こる。第1に、「信者が誰も来ない」。第2に、「ノンクリスチャンが誰も来ない」。教会員がこの戦略をよく理解して、この礼拝に人々を連れて来ない限り意味がないのです。そういう場合、日曜日の礼拝はそのまま行いながら、求道者向けの小グループを行なうという事もできます。

以下で、ノンクリスチャンへのアプローチを詳しく見てみましょう。私たちは、これに変更を加え、その頭文字をとって“3D”と呼びます。(Develop, Discover, Discern)

① ノンクリスチャンと人間関係を築く (Develop Friendship)

クリスチャンの多くの問題は、クリスチャン同志で固まってしまうという事です。クリスチャンはクリスチャンとしか接点をもたない。クリスチャンとしての生活が長くなればなるほど、ノンクリスチャンとの接点が減っていく。しかし、イエス様は、罪人の友達が増えていったのです。律法学者は、イエスを批判しました。

どのように、友人を作ったらよいのでしょうか。どうしたら、クリスチャンだけが孤立しないように出来るのでしょうか。私たちはそれを、「関係を作る知能 (Relational Intelligence)」と読んでいますが、ノンクリスチャンと一緒に肩を並べて歩むことが必要なのです。信徒を育成するとき、残念ながら私たちはどのようにして人間関係を作るのか、ということから始めなくてはならない状況なのです。他の人々の興味に、どのようにしたら心から接点を持つことが出来るかを教えなくてはならない。アメリカでは、ノンクリスチャンはクリスチャンを信頼していません。壁があるのです。私たちは、なぜノンクリスチャンが、クリスチャンに壁を感じるのかという事を一日使って考える必要がある。私たちはそれを理解しなければならないのです。それは妥協するという意味ではなく、どのようにして信頼関係を築いていくかということです。もし私にとっての誉め言葉があるとしたら、「彼は罪人と時間を過ごしすぎている」という言葉でしょう。

② 証しと福音を分かち合う (Share) → ストーリーを発見する (Discover Stories)

ここがパラダイムシフトの必要な部分です。私の人生の中で最もすばらしい発見をお伝えします。伝統的な伝道では、ノンクリスチャンに対して、私が、神の事や私の事を伝えます。『感染力の強いクリスチャン』でもそのようなことを教えています。人々に私のストーリーを伝え、神のストーリーを伝える。つまり、「私の話を聞いて、あなたは回心しなさい」というものです。これが典型的に上手なのは、ビリーグラハムです。

しかし、ここでは大事なステップが抜けています。それは、私たちが、彼らのストーリーを全然理解しようとしないということです。クリスチャンは、自分のストーリーをやめて、彼らのストーリーを聞こうとは考えません。機械的な答えだけをあげて、福音を届けようとしているのです。

私たちは、この「分かち合い (Share)」を、最近では「ストーリーを発見する (Discover Stories)」

という風に呼ぶことにしました。人間関係を築いた後、彼らの話を聞くのです。ここでは、二つの事ができます。第 1 に、彼らに質問をします。彼らの信じている神のことについて聞いてみます。なぜそれを信じているのか。死んだらどうなると思うか。なぜこの世にはこんなに悪があるのか。なぜ私たちはここにいるのか。等々。すると、ノンクリスチャンは自分の経験、考えを話してくれます。彼らは話したいと思っているのです。第 2 に、彼らの話を聞きます。そして、次のステップを見出すのです。

③ 招待 (Invite) → 次のステップを見出す (Discern Next Step)

ひょっとしたら、その人にとっての最善は、日曜の礼拝に連れて来るのではなく、Seeker グループに誘う事かもしれません。あるいは、ただ祈る事かもしれません。または、もっと友情を深める事かもしれませんし、信頼関係を深める事かもしれません。もっと質問して、よく聞く事かもしれません。

このようにして、信頼関係を築くと、私たちが話を伝える事ができる権利を手にする事になります。このプロセスを進めると、ノンクリスチャンが自分で答えを見出す事が出来るようになります。私たちの役割は、ただ単に彼らの人生における聖霊様の働きを進めるだけなのです。イエス様自身が、そのような方法を用いられました。質問に対して、質問で答えられました。そして、その人が自分で真理を発見できるようにさせました。このプロセスの最後は、自分自身で真理を見出す事ができるようにさせることなのです。

Seeker Small Group はひょっとしたら、日曜の礼拝よりもパワフルなものかもしれません。名前を、Talk Back と呼ぶ事にしました。ただ単に礼拝を通して与えるだけでなく、自分がどのようなプロセスにあるかということを見出せるようにしました。そして、ノンクリスチャンが自分自身の状態を安心して出せるようにしました。

<池田師>

日本では、伝道礼拝のようなものに、いきなり新しい人を招くのには難しさを感じる。アメリカと日本の違いもあると思ったが、今の小グループの重要性を聞くと、同じような事があるのかなと思いました。日本では教会の敷居が高いが、小グループなら来られるという人がいます。その点は、日本でもアメリカでも同じようですね。

教会に招くのではなく、教会を相手の方へ持っていく。小グループをあちらこちらで行なうという時、特別なタレントを持った伝道者ではなく、普通のクリスチャンがぴったりだと思いました。なぜなら伝道的な人は、一方的に話をして、会話のプロセスを壊してしまうからです。話をしないで聞くように心がける事の重要性を思いました。

<Garry Poole 師>

ノンクリスチャンは、話をできる場を求めているのです。私たちの Seeker Small Group では、クリスチャンが 2 人だけで、他は全部ノンクリスチャンという状況でそれぞれが自分のことを話します。典型的には、1 時間 15 分を話し合い、残りの時間でともに食事をし、計 2 時間を過ごします。このような集まりを通して、ある人から「ここに来て初めてイエスが神だということを発見しました。」という声を聞きました。しかし、その時私たちは、別にそのような説教をしたわけでもないのです。

<木島師>

今の話を総合すると、礼拝か伝道かの問題ではなくて、一人の魂が主を知って礼拝者としてなっていくために、教会が地域に出て行くということのようですね。

<Garry Poole 師>

私たちは、こういう言葉を使います。“Seek First to understand before seeking to be understood.”つまり、「理解される事を求める前に、理解する事を第一に求めなさい。」ということです。この事はとても重要です。

<東海林師>

私たちは、向こう 5 年間の伝道計画を建て、「誘える教会、誘える教会員へ」というスローガンを掲げましたが、今耳を傾けることの重要性を教わりました。まず、私たちが誘う事が出来る友がどれほどいるのか。話すことをつつしんで、よく聴くところから始めたいと思います。

<Garry Poole 師>

クリスチャンはノンクリスチャンを誘いますが、一方でノンクリスチャンの誘いには乗ろうとしません。私たちが、すでにアジェンダを決めてしまっているのです。彼らを「プロジェクト」と考えてしまっています。私たちが大切にしているアイデアは、「本物の友情関係を築く」ということです。

ここで、ウィロークリークでのバプテスマの様子を DVD で見たいと思います。もちろんバプテスマが人を救う訳ではないが、内側の決心の外側への表れであるので、私たちはとても重視しています。私たち自身のノンクリスチャンへの思いを確認しましょう。

この中で、ビルハイベルズは同じボート仲間で、とても近い友人だった Dave に洗礼を授けます。小グループを通して彼はクリスチャンになりました。ビルハイベルズは、他の人よりも彼を長く水の中に沈めています。ビルは彼に「Dave、君は罪をたくさん犯したから長くつけなきゃいけない」と Joke を言っていました。でも、それは感動の時でした。彼らの人生が変えられることを私たちは願っています。

<池田師>

私たちがウィロークリークに行った時、洗礼層の横の十字架に、一人一人ピンで何かをはりつけているのを見ました。それはとても感動的な光景でしたが、何を表しているのでしょうか。

<Garry Poole 師>

バプテスマについて彼らに説明するとき、それぞれ自分の罪を書き出して十字架につけなさいと話しました。それは、ぜったいに誰もみないようにして、処分します。彼らに、誰も見ないということを約束します。イエスキリストの赦しを象徴的に表現する行為なのだから、人が見る必要はありません。

<登喜子師>

Seeker Small Group は具体的にはいくつあるのでしょうか。また、それを導けるリーダーはどれぐらいいるのでしょうか。そして、どのように訓練するのでしょうか。

<Garry Poole 師>

ピーク時には110個ありました。クリスチャンは2人だけで、そのほかのメンバーは皆ノンクリスチャンです。そしてクリスチャンは、一人がリーダーで、もう一人が見習いです。ノンクリスチャンにとって、彼らが安全だと感じるためには、ノンクリスチャンの人数の方が多いほうがいいのです。また、クリスチャンが一人だけだと、クリスチャンが責められる感じになってしまいますが、逆にクリスチャンがたくさんいると、すぐに答えを与えようとしたり、裁いたりしてしまうのです。

リーダーとなる者は、トレーニングを受けて、プロセスを理解した者である必要があります。トレーニングの方法には何種類かありますが、典型的には6週間のトレーニングを行います。シンガポールでは、300人ぐらいの人に、9時から3時までの6時間で、必要なことの全てを話しました。彼らに、Seeker Small Group を数ヶ月の間に始めるようにとチャレンジの招きをしたところ、75%がコミットしました。

日本の場合、教会にも敷居があるが、家庭に呼ぶのにも敷居があります。その様な状況において、どのようなことを奨励しているか。

確かに日本とは文化的な違いがあるかも知れませんが、シカゴの地域では冬になるとシャッターを閉じて、お互いが交わらなくなりますが、そういう時はノンクリスチャンを招けるような、共通する関心事等で招待します。文化になじまないような事をして無理に来させようとしてもダメなので、自然な流れでできるようにと気を配ります。たとえば、ビル先生はヨット仲間の友達がいましたが、その様な場合は一緒にスポーツに参加するのがいいでしょう。普通の形で隣近所の方々と交われないようなときは、散歩のグループ等いろいろなグループを作るのもいいと思います。

クリスチャンが、ノンクリスチャンと一緒に時間を過ごせない大きな理由は、教会がクリスチャンを忙しくさせているということがあります。彼らは2種類の礼拝に来て、奉仕をして。さらに働きます。私たちは、もっと教会員を自由にして、彼らがのびのびとした生活をして、ノンクリスチャンとともに歩めるようにしなければなりません。そういう風にやりなさいといっている指導者が、まずそのようなモデルにならなければいけないと思っています。指導者が、ノンクリスチャンともっと時間を取れるように優先順位を変えるのです。シンガポールでは、牧師先生たちにもっとノンクリスチャンと時間を過ごすようコミットさせました。クリスチャンになればなるほど、ノンクリスチャンと時間を過ごせるようにと変えていかなければなりません。

<池田師>

ウィロークリークでは、月曜日にノンクリスチャンに対しての様々なミニストリーを行なっていると聞きました。そして、困っている人を招いて、請求書をもってきたら払ってあげるとか、車をあげるなどのこともされていると聞きましたが、そのあたりの事をもう少し教えてください。

<Garry Poole 師>

いろんな形の奉仕のミニストリーがあります。そこに来た人々に対して、次のステップとして Seeker Small Group に招待しています。その際、グループは同じ種類の問題を抱えた方々で構成するように

する。

<白石師>

彼らの話をずっと聞きっぱなしなのでしょう。または、こちらからも話をするのだとすると、どの程度で切り替えるのでしょうか。

<Garry Poole 師>

「しゃべって神の国に導くのではなく、聴いて神の国に導く」のです。しかし、聴いてばかりではなくある時には話をしなければなりません。どの時点でそれをするかの見分けが必要ですが、ノンクリスチャンの方が「あなたはどのように考えているんですか」聴いてきたら、それを話すタイミングだと考えられます。それまでは、じっくり聴く必要があるのですが、聴き続けるには忍耐が必要です。

どうしても、こちらから話さなきゃいけないような気がしてしまうのです。伝道者の書には、「話すのに時があり、聞くのに時がある」とあります。礼拝が話す時だとすると、小グループは聞く時です。

<東海林氏>

銀座の一流クラブでは、「ただ聴きなさい」と教えるのだそうです。そうすると、お客さんは、今日はいいいきを過ごせた、と満足して帰っていくのだそうです。

<Garry Poole 師>

同情をもってインパクトを与えていくような伝道の方法が必要です。ノンクリスチャンが自分の考えを話し始めると、自分自身でもその事を、理解していないことに自分で気づき始めるのです。

そのような会話を導くためには、ソクラテス方式の問答を用いたりします。これは質問に対して、逆に適切な質問を返すような方法です。イエス様もこの方法を用いていました。

以上